

伊東マンシヨ肖像画発見

天正遣欧使節

安土桃山時代、ヨーロッパへ派遣された天正遣欧使節の正使、伊東マンシヨ(1570?~1612年)の肖像と記された油彩画がイタリアで見つかった。伊トリブルツィオ財団の文書保存・管理担当職員、パオラ・デイリコさん(41)が調査し、18日発行される同財団の学術誌に論文を発表する。1585年、ベネチア訪問時の姿を、当時の大画家ティントレットの息子であるドメニコ・ティントレット(1560~1635年)が描いたと位置づけている。



見つかった伊東マンシヨの肖像画(個人蔵、画像はトリブルツィオ財団提供)。裏面に「豊後の王の使節、ドン・マンシヨ」などを意味する「D. Mansio Nipote del Re di Figenga Amb(asciator) e del Re Francesco Bvgnocingva a sva San(tit)a」の銘文がある ※かっこ内は当時の省略表記を補った文字

巨匠・ティントレットの工房で描かれる

この油彩画は縦54センチ、横43センチ。伊北部在住の個人の所蔵。注目を受けたのはティントレットと伝えられる。17世紀に携わったデイリコさんが2009年に確認。スペイン風の衣装を着た東洋風の青年が描かれ、裏側に「Mansio」などと記されることから、遣欧使節の史料や絵の来歴などの調査を進めてきた。文獻記録によると、ベネチア共和国は使節4人の来訪を記念して肖像画制作を決めた。注文を受けたのはティントレットと伝えられる。17世紀半ばのその伝記には、マンシヨの肖像だけが現存していると記されていたが、絵の来歴をたどると、ティントレット工房の遺品だったと判明した。さらに、美術史家でティントレット研究の権威セルジオ・マリネッリ氏に鑑定を依頼したところ、息子ドメニコの画風との判定。エックス線撮影で、えりの部分が父の没後に流行した派手な形式に描き直されたことも確認でき、ドメニコが仕上げたと結論づけた。マンシヨの肖像は使節と同行した神父の計5人を一図にまとめ、当時のドイツの新聞に掲載された図版や、長崎歴史文化博物館が所蔵する素描などが知られるが、今回は本格的な油彩の肖像画。ベネチアでの歓待ぶりを裏付ける史料としても注目されそうだ。小佐野重利・東大文学部長(イタリア美術史)の話「画風や服装、絵の来歴など、手堅い論文だと思う。滞在から実際の制作に至るプロセスには研究を深めるべき点も残るが、ベネチア派の重要画家であるドメニコの腕前もあって、遣欧使節がまだ幼さを残す生身の日本人だったことを実感させてくれる作品だ」

イタリアで個人所蔵

鑑定で判明

天正遣欧使節 イエズス会が企画し、1582年(天正10年)、九州のキリシタン大名、大友宗麟、有馬晴信、大村純忠の名代として、欧州に派遣された伊東マンシヨ、千々石(ちぢわ)ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノの少年4人を中心とした使節団。インド洋などを経由してポルトガル、スペインなどを歴訪した。イタリアではローマ教皇グレゴリウス13世に謁見を果たし、90年に帰国した。

自転車女性をけり現金など奪い逃走

さいたま

17日午前0時55分頃、さいたま市浦和区大原の路上で、自転車で帰宅していた同市の女性(19)が、暗がりの中から現れた男に突然蹴り倒され、殴られたうえ、現金約500円などが入ったリュックサックを奪われた。女性は膝などに軽いやけどが。浦和署は強盗傷害事件として調べている。発表によると、男は35歳ぐらいで、いずれも黒っぽい野球帽に上着、ズボンを身に着けていたという。